

名作からのメッセーヂ

心を動かすアートの秘密

小平 信行



青山ライフ出版

まえがき

黒い奇怪な絵で知られるフランスの画家オディロン・ルドンの絵で以前から気になっていた一枚がある。男とも女ともわからない顔が宙に浮いたかのように描かれた「眼をとじて」だ。これをわたしは何故だかわからないが勝手に大きな絵だと思っていた。しかし展覧会で実際に見ると、その絵は意外なほど小さかった。後から調べてわかったことだが、ルドンのあの黒い画風はこの絵を境に明るい華やかな絵に大きく変わる。その変わり目となったのがこの小さな絵なのだ。

私の大好きなルーシー・リーの完璧なまでの美しい器。でも本物を近くで見ると、そこには明らかに人間の手が作りだしたと思われる形の歪みや線のゆらぎが見て取れる。もしかすると、これこそが美しい器の秘密なのかもしれない。

20世紀最後の宗教画家ともいえるルオー。そのルオーの師ともいえるのがモローだ。モローと言えば神話を題材にした細密画のような絵が知られているが、実際にモローの絵をよく見ると荒い筆遣いと盛り上がったような絵の具が実に印象的だ。確かにモローはル

オーの師であったことが納得できる。

展覧会へ行く醍醐味は、やはり本物と出会えることだろう。それまで写真などで何度も見てきた作品も、本物を目の当たりにすると、様々な発見がある。そしてほんの少しその作品や作者について調べてみると、そこには意外な事実が隠され、新たな姿が浮かび上がってくる。

人はどのようなアートに魅せられるのか。人を虜にするアートには何が秘められているのだろうか。

私は長い間、放送番組の制作という仕事を通して、現実の一断面を切り取り編集し電波を介して伝えてきた。そこには多かれ少なかれ制作者の視点やメッセージが入っている。そしてできる限り多くの人に、わかりやすく伝えたいと腐心する。

一方で芸術もまた絵画や写真、工芸、建築などを通して自分の想いを伝えるということに関しては似ている部分がある。人を魅せる作品、人を虜にする作品を造ることができる。それは作者にとって制作の大きなモチベーションであり、アートに携わる人間の醍醐味に違いない。質こそ違え、同じく伝えたいというひそかな想いが横たわっているのである。

番組制作という仕事に携わりながら、50代の半ばに美術大学に入り直しアートの勉強をしたのも、少々大げさに言う人々を魅せるアートの秘密を探りたいと思っただけからである。今、日本各地ではおびただしいほどの展覧会が企画され、多くの人がアートに接する。もしかしたらこんなにアートが身近な国は他にはないかもしれない。

人の心を動かすアートにはいったいどのような秘密が隠されているのか、そして作者はそこにいったいどのようなメッセージを込めようとしたのか。心の奥底にある私なりのアートへの興味と疑問をわずかな知識とつたない文章力で書き綴ったものだ。

本物を見た後はちよつと奮発して図録を買い、家に帰って気になった作品をもう一度反芻してみる。作者の生きた時代を知り、制作の背景を探っていくと、なぜこの作品が私たちの興味を引き、何が魅せる要素になっているのかが見えてくる。想像力を思い切つてはばたかせながらアートの森をさまよい歩いてみよう。

名作からのメッセージ 目次

まえがき

Artists

「孤高の天才建築家 美の秘密」 建築家 白井晟一

「絵画的な写真」 写真家 オノデラユキ

「日曜写真家の創造力」 写真家 マリオ・ジャコモメリ

「事実とは何か・報道写真の真価」 写真家 ジョセフ・クーデルカ

「全体と部分・驚異の高精細写真」 写真家 アンドレアス・グルスキー

「動く絵画・静止する映像」 写真家 松江泰治

63

53

43

35

25

13

3

- 「写真で表現『シュルレアリスム』」 画家・写真家 マン・レイ 71
- 「美しいかたちの秘密」 陶芸家 ハンス・コパー 79
- 「ピンホールも景色」 陶芸家 鈴木蔵 89
- 「美しすぎる器」 陶芸家 ルーシー・リー 97
- 「闊（いき）の美学」 画家 ジョルジュ・ルオー 107
- 「混沌の中の秩序」 画家 ジャクソン・ポロック 115
- 「黒い人影は誰なのか」 画家 松本竣介 121
- 「静けさの秘密」 画家 ジャン・シメオン・シャルダン 133
- 「果たして現代の九相図か」 画家 松井冬子 145
- 「師を超えて」 画家 モローとルオー 153

「眼をとして心で見る」 画家 オダイロン・ルドン

「抽象絵画が生まれたわけ」 画家 ヴァシリイ・カンディンスキー

「東洋の余白、西洋の余白」 画家 ターナー

Exhibition

「『見立てる』ということ」 茶事をめぐって

「肖像画に込められた物語」 プーシキン美術館展

「風景画が語る人と自然」 メトロポリタン美術館展

「日本的感性と印象派」 ワシントンナショナルギャラリー展

「明王からのメッセージ」 空海と密教美術展

「陰と影・想像力の源」 陰影礼讃

「アートの境界線」 イメージの力

あとがきにかえて

Artists

「孤高の天才建築家 美の秘密」
建築家 白井晟一

使うこと、すなわち「用」として忠実に作られたものの中に自ずと美が存在する。そう考えたのは民藝運動の提唱者 柳宗悦だった。彼は日常使われる様々な道具や家具などに美を見出したのだ。しかし一方で例えば焼き物などで経験することだが、美的な評価が高いものが、必ずしも使いやすいとはいえない。逆は必ずしも真ではない。

建物についても同じことが言えそうだ。派手なデザインで街のシンボルになった建物が必ずしも使いやすい、あるいは住みやすいとは言えないことがしばしばある。建築家は様々な尺度を持って建物の設計をしなければならない。まず使い勝手、住み心地、そして美しさ、街との景観の中でデザインが許されるかどうかも重要な要素だ。さらに強度もまた大切な項目だ。地震がおきてすぐ壊れてはどうしようもない。そして予算。施主の要望は時に厳しい時もある。これほど多くの要素を満たしながら建築家は同時にそれを通して自己表現もしなければならぬ。建築は芸術作品の一種だと私は考えるが、絵画や彫刻とは異なる世界だ。

建築家と同時に哲学者でもあった白井晟一は建築をめぐる「用の美」に深く関心を持ち、様々に思考をめぐらせた。パナソニック電工汐留ミュージアムで開かれた白井晟一「精神と空間」(2011年1月から3月)はそのことを強く感じさせる展覧会だ。

白井晟一は20世紀の半ばを中心に様々な特徴ある建物を生んだ。展覧会では設計図や透視図、写真、さらにミニチュアの模型などを通して、住宅や公共建築、美術館など8つの大きな柱に沿って白井の幅広い活動を紹介している。この中にはすでに解体され、現存しない建物や、設計はしたが実現しなかった幻の建築案も多くあり、展覧会はこうした幻の建物についても残された資料を使って白井晟一の考え方を明らかにしようとする貴重な機会となっている。

まず初めに紹介されるのが1967年に東京の中野に作られた自らが瞑想し黙考するために作った書斎「虚白庵」だ。「虚白庵」は残念ながら昨年取り壊され今は存在しないが、かつて撮影された写真や書斎に置かれた家具や彫刻などが展示されており、建物や空間の雰囲気が伝わってくる。「虚白庵」の特徴は窓が極めて少ないことだ。自らのエッセー「無窓無塵」に「100平米ほどの書斎に開口部は一つだけでこの住居には窓がないとよく言われていた」と記している。洞窟のように薄暗い部屋。間接照明で照らされる書や彫刻などのオブジェ。部屋から一歩外にでるとそこには室内とは対象的に明るい陽光に照らされた庭が広がる。敷き詰められた白砂と一本だけ植えられた枝垂れ梅が印象的だ。この自邸の全てが白井にとって考え、瞑想するために作られた空間である。